
追憶の長谷川千雨

ベンジャミン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

追憶の長谷川千雨

【Nコード】

N5530U

【作者名】

ベンジャミン

【あらすじ】

なんかネギまの長谷川千雨が電波を受信したとか、そんな感じのよく分からない話です。意味不明な所が看過できない場合「千雨の世界」でググると多少溜飲が下がるかも。微クロス。

彼女、長谷川千雨はある記憶に苦しんでいた。
なにも彼女の部屋にある、痛々しいポエムや日記、更にはコスプレ写真についての記憶ではない。

彼女にあるのは、不思議な世界での記憶だった。

千雨の両親が殺され、彼女は肉体改造を受けたあげく、昔住んでいた麻帆良に戻ってくるという記憶だ。荒唐無稽も甚だしい。

だが詳細ははっきりとはしない。おぼろげに様々な人々が見え、断片的なワードが脳内にちらつく程度だ。

クラスメイトの大河内アキラや綾瀬夕映と共に、様々な事件へと立ち向かう。その際に小さなマスケット風のネズミや、メガネに白衣を着たあからさまな科学者風の間人も出てきた。

「漫画かよ」

チープで良くあるバトル漫画の主要人物の様だ。

記憶、と言つものには語弊がある。これを正確に言つのなら『妄想』と言つのだらう。もしくは『夢』だらうか。

なにせ千雨の両親は健在だし、大河内とはろくに話をした事が無い。綾瀬は席が近いだけあり、挨拶くらいは交わすものの親しいとは言えないだらう。ネズミやエセ科学者に至っては、まったく言つて知らない。

故に長谷川千雨はそれを『夢』と結論づけた。

ときおり見てしまう不可思議な夢、本来ならすぐ忘れてしまうのに、余りに印象が強すぎて覚えてしまう。そんな感覚なのだらう。

自分が大河内や綾瀬と共に、麻帆良を騒がす猟奇殺人の犯人を倒す、など夢想でしかない。

「だってなあ」

麻帆良学園、女子中等部の寮の自室で、千雨はパソコンチェアに座りながら、近くにあったテレビの電源をつけた。

そこに映るのは、最近麻帆良で話題となっている猟奇殺人事件の報道ニュースだ。

ニュースではスタジオ内で事件の経過が、フリップを使って説明されている。千雨からすれば耳からタコがでるくらい、聞き飽きた報道内容だ。

確か、事件は今年の文化祭の終わりくらいだろうか、夏休みの少し前に麻帆良市内で女性の手首無し遺体が発見された。

警察の発表によれば、死因は第三者によると思われる外傷　　つまりは殺人事件だ。

麻帆良は騒然とし、報道陣が一気に押し寄せた。被害者はウルスラ女子の高校生らしいが、千雨の通う女子中等部にも報道が押し寄せた。

学校では「インタビューに答えられないこと」と生徒に厳命を出し、寮との登下校には集団登校が義務付けられた。休みの日の一人での外出も禁止とされた。

とは言っても、夏休みになった途端、ほとんどの生徒が実家に帰省してしまうわけだが。

その後、犯人の音沙汰は無く、テレビでの報道も減る一方。集団下校は続いていたが、その事件は徐々に忘れられていく事となる。

だが、一ヶ月ほど前の十月に事態は一変する。また新しい遺体が発見されたのだ。

同じく手首の無い遺体、警察の発表によれば同一犯との見方だそうだ。

再び麻帆良は混乱の渦となり、件の報道陣がまた帰って来た。

ニュースの映像は麻帆良市内を映している。千雨も見覚えのある通りだった。

「あそこでの買い食いも、なかなか出来そうにねーな」

お気に入りのクレープ屋が映ったが、この寮からは距離がある。よく休みの日に、買出しがてらに寄っていた店だ。

千雨の『夢』は昨日朝起きた時に、いつの間にか脳内へそっと入り込んでいた。思わずベッドで三十分ほど固まってしまった程だ。しかし、冷静に考えれば『夢』も理解できる。その内容は一部を除き、千雨の周囲にあるものを寄り合わせて作られているからだ。

「クラスメイトに、殺人事件ねえ」

思わずニュース番組に悪態をつきたくなる。「お前らが毎日殺人事件なんか報道してるから、あたしが悪夢を見てしまう」と。テレビを見ていたら苛立ちが募ってきたので、その電源を落とした。

「　　」
　　。　　。　　。　　。　　。

カタカタとキーボードの音だけが室内に響いた。机の上にはデスクトップパソコンが一つ。

女子寮は相部屋だ。千雨の部屋も例外では無いが、部屋にいるのは千雨一人だった。

もう一人の住人は部屋に帰ってこない事が多く、ベッドや私物が幾つかあるものの、ほとんど千雨の一人部屋だった。

「んー、やっぱりアクセスの伸びがいまいちな。少しブログのデザインも変えてみるか」

余り友達のいない千雨は、ネットにはまり込んでいた。趣味が高

じてついにはコスプレにも手を出してしまっている。

以前、目線で顔は隠したものの、コスプレした画像をネット上に投稿してら、予想以上の反響があった。

褒められるその気持ちよさといったら、想像以上の快感だった。よって、千雨はネットアイドルになろうと決意する。

「でも、にわかになりたくない。なるなら一番だ、うひひひ」

気味の悪い笑い声を上げながら、ブログのデザインをイジるために、テキストエディタを起動してソースをいじっていく。

凝り性な性格により、千雨はネットアイドルの下準備として、様々な専門知識を獲得していった。そこそこのプログラムも最近ではすぐに組める様になったし、ブログのデザイン程度ならわざわざ実物を見なくてもプログラムソースだけで理解できるぐらいだ。

現在は実験的にブログを立ち上げて、様々な事を試している。来年、ネットアイドルとしてデビューした際に失敗を犯さない様にするためだ。

その日の夜、寮の一室では不気味な笑い声がひっそりと響き続けた。

明けて月曜日。

ねぼけ眼の千雨は、伊達メガネの下から手を突っ込み、目元をグジグジと擦った。

「あふ」

あくびをなんとか噛み殺すも、その吐息までは消せない。
朝のホームルームに間に合うように2・Aの教室に辿り着き、ふらふらしながら自分の席へと向かう。

「おはようございます、長谷川さん」

「ん、ああおはよう、綾瀬」

隣の席の綾瀬夕映と目が合い、挨拶をする。

挨拶をするだけすれば綾瀬の興味は失せた様で、彼女は同じ部活のクラスメイトの輪へと入っていった。

千雨は頬杖をつきながら、先日の『夢』を思い出した。

(やっぱり夢だよなあ)

『夢』の中では綾瀬はいたく自分に執心だったらしい。

とは言っても、千雨にその？ケ？は無い。男性同士のものなら多少二次元で嗜むが、正直リアルでそんなのはご免だった。

(つか、ありえねえだろ。女同士って……)

眠気も合わさり、想像するだけで気持ちが悪くなった。

だが、同時に寂しさもあった。『夢』の中ではあれだけ自分と親しかった存在が、現実ではああもそっけない。まあ、無理もなからうが。

千雨はふと教室を見渡し、ある人物を見つけた。

長身のクラスメイト、大河内アキラだ。

水泳部期待のホープで二年生ながら次期エースだとか、高等部の人間も目をつけてるとか、男子生徒のファンが多いとか、なんとか

かんとか。千雨がたまたま小耳に挟んだ内容だが、彼女はそんな感じらしい。

淡い期待。彼女ももしかしたら、と話しかけてみる事にした。他のクラスメイトと談笑する大河内に近づき、後ろからそつと声をかける。

「な、なあ大河内……」

余り自分から話しかけた事が無いために、少しもった。

大河内は千雨の声に気付き、そつと振り向いた。まさか千雨に話かけられるとは思わなかったらしく、ちよつと表情に驚きが混じっていた。

「なに、長谷川」

サバサバとした返事。されど、この一言で充分だった。

「あ、いやごめん。間違いだつた、何でも無い」

「？ そつ」

少し眉間に皺を寄せながらも、大河内は千雨の事を気にせず、クラスメイトとの談笑の輪に戻っていった。

(『長谷川』、ねえ)

余り話した事の無いクラスメイトを、いきなり下の名前で呼ぶ人間は少ないだろう。

それに。

(あたしは何言つつもりだつたんだ。大河内とあたしは幼馴染で、

なんかすごい前世っぽい記憶が云々、電波過ぎるだろ)

自分の思考に、ぴくぴくと口元が引きつった。

大体、幼馴染、というのが麻帆良では当てにならない。麻帆良は中高一貫どころでは無く、幼稚舎から大学までの一貫教育まで行っている。

このクラスの半分程が麻帆良の幼稚舎出身であり、千雨もその半分に含まれていた。必然、広義の意味ではクラスメイトの半分が千雨の『幼馴染』なのだ。

実際の所、『幼馴染』という程親しい人は、千雨にはいない。若干人間不信であり、人との触れ合いを苦手としている千雨には、その様な気軽な相手はクラスにいなかった。

いや、寮の同居人とは多少だが親しい関係を保っている……のか？

(まあ、喧嘩はしないわな。部屋にもあんまり居ないし)

寮の同居人をそつと見るが、いつも通り静かに座っていた。

(あいつと一緒にいると、なーんか居心地良いんだよな)

家族以外の人物と、一緒に部屋にいと若干萎縮してしまうのを、千雨は自覚していた。だが、彼女と一緒にいる時は、なぜかその兆候が無かった。

(まあ、『夢』は『夢』って事だな)

数日苛まれていた、脳にこびりつく『夢』に、千雨は多少の折り合いをつけるのであった。

ズズズ、と紙パックの中のフルーツ牛乳をすすりながら、体がブルリと震えた。

「やっぱり温かいものにしとくべきだったかな。うう、寒い」

場所は屋上。もう十一月となり、秋の彩が徐々に失われていつてる。

そのため、昼休みに屋上で昼食を取る人間も減り、周囲はまばらだ。

千雨はわざわざコートを羽織り、更にはフードまでかぶってここで食事を取っていた。

手には空の菓子パンの袋が一つ。あと奮発したデザート用のゼリーもあった。

「ゼリーって。なんであたしはもっと温かいデザートを選ばなかったんだ」

十数分前の、売店にいた自分を恨みたくなる。

どうにも千雨はクラスの喧騒が苦手だ。昼休みとなると、それは一層酷くなる。

「ここは幼稚園かよ」

どたばた走り回ったり、机をなぎ倒したり、そんな風になりながらもニコニコと笑うクラスメイト。頭が狂いそうになる光景だ。

そのため昼休みになるとクラスから逃げ出し、この屋上で朝食を取るのが千雨の毎回のパターンだった。

「ここも限界だな」

もうすぐ真冬になる。時期的にもそろそろ屋上は潮時だろうと、千雨は思う。

ベンチから立ち上がり、近くの手すりに寄りかかった。さすがに屋上というだけあり、麻帆良が遠くまで見渡せた。

「魔法使い、ねえ」

『夢』によればここは魔法使いの街らしい。しかし、千雨は幼稚舎からこの街で過ごしているが、魔法なんてものは見た事が無かった。

視線を遠く、千雨は東京方面へと向けた。

「超能力に《学園都市》って聞いたことねえぞ。それに《学園都市》って紛らわしすぎんだろ」

ここ麻帆良は『麻帆良学園都市』と呼ばれている。そして千雨の『夢』には東京西部を中心した独立都市《学園都市》なるものが出てきたらしい。超能力を開発している、とかそんな設定らしいが、これらの与太話も同じく、千雨の現実の記憶とは合致しなかった。

「多摩に住んでる親戚の叔母さんちも、《学園都市》ってのに入っちゃまうわけか、ハハハ」

余り親しく無いが、数年前の正月に母方の叔母の家に遊びにいった事がある。確かそれが奥多摩の方だったと記憶していた。

文部省当りがもしかしたら東京西部に学園都市を作る計画をしているかもしれないが、少なくとも千雨は知らない。

「超能力ってのがあんなら行ってみたいかもな、少なくともここよりはマシだろう」

千雨は自分の人間不信の原因を、なんとなく理解している。自分の弱さを他者に擦り付けるのは嫌だが、実際のところこの麻帆良は千雨に合っていないのだ。

この街そのものが持つ空気が、千雨の波長と合致しない。価値観の乖離は、幼い子供同士の場合極端なコミュニケーション不全に至る。

幸いイジメにまではならなかったが、昔の千雨は子供の持つコミニティにはうまく入り込めなかった。

今ならば、作ろうと思えば友人関係を作れるだろう。それでも、千雨は一人を選んでいる。彼女なりの処世術であり、他者に対する慈しみでもあった。

話しあう事さえしなければ傷つきあう事も無いだろう、という暴論にも似た帰結である。

千雨はゼリーのフィルムをペリペリと剥がし、小さなプラスチックスプーンで一気にがつついた。マンゴー入りのゼリーを、もの数分で食べ終わる。

胃に冷たいゼリーが入ると、必然体も冷えた。

「うっ……さすがにダメだわ」

コートの襟を合わせて、体を縮める。昼食のゴミを屋上のゴミ箱に捨て、校舎内へ戻っていく。

(昼休みが終わるまであと二十分。どうしたもんかな)

教室に戻る、という選択肢は無い。

千雨は生徒もまばらな廊下を、コツコツと足音を立てながら歩き出した。

つづく。

1 (後書き)

全三話予定。一応書き終わってますが、色々考え中。

「ちうだよ〜」

甘ったるい様なわざとらしい猫撫で声を出しながら、カメラに向かってポーズを取る。

千雨の服装はいつもの地味な私服でも、ましてや制服でもない。やたらにレースとりボンが多用されているブラウスに、傘の様に広がるスカート、頭には大きな帽子が被さり、長い髪も左右で二つに纏められている。

正直、外を普通に歩けるような格好では無かった。

それはそうだが、これはアニメのキャラクターコスチュームを模した、所謂コスプレというやつだからだ。ちなみにコスプレをしている時だけ、千雨は伊達メガネを外している。

千雨はコスチュームの元となったキャラを脳内で想像しながら、なりきった様にポーズを決めていく。決めたポーズと共にリモコンでカメラのシャッターを切り、出来栄を確認しながら何度も撮影を行なった。

ときおり決めポーズと共に、自分の決め台詞なんかも叫んでみる。本人は楽しくてしょうがないが、第三者が見たらかなり痛い現場なのは明白だ。

「ふう、今日はこんな所か」

撮影が終わり、カメラの画像データをパソコンで表示させ、スライドショウで次々と見ていく。

「ふふふふ、我ながら良いじゃないか」

自画自賛。

自分の写った写真を見ながら、ニタニタと笑みを深めた。

「おっと、皺になる前に服替えないとな」

千雨はコスチュームをゆっくりと脱ぎ出す。このコスチュームは千雨が数ヶ月かかって自作したものだ。そのため市販品に比べて明らかに脆い。装飾過多なものその理由の一つだろう。

千雨は下着姿になる。さすがに肌寒さを感じるものの、それより気になるのはコスチュームの状態だった。

「やべ、肩口のところ、糸がほつれてきてるよ……」

クローゼットの中からミシンを取り出し、下着姿のまま修復を始めてしまう。

更には楽しくなりだし、あれやこれやと様々な変更もし始めてしまった。

「へっ、くしゅん」

くしゃみが一つ。

「あ、あたしは裸で何やってんだよ」

自分の姿を思い出した途端、部屋の冷気が一気に押し寄せてきた。

「こ、このままじゃ風邪引いちまう」

千雨は新しい下着とパジャマを取り出し、そのままシャワールームへ飛び込んだ。

十分後、千雨は肌を上気させながら、ほっとした表情でシャワールームから出てくる。バスタオルで髪をぐしぐししながら、ハンドドライヤーを出し始めた。

湯冷めしない様に、エアコンの温度も高くする。

「今日も頑張ったぜー」

ドライヤーを使いながら、自分のコスプレ写真の出来栄に、再び笑みを強くしてしまう。風呂上りにミネラルウォーターのペットボトルのラッパ飲みもした。

髪も乾ききり、さあ寝ようと思っても、それはすぐに出来ない。

「この時が一番面倒だよな」

部屋は煩わしい状態だ。デジカメは三脚に固定され、撮影用の背景シートが壁と地面に貼られている。更には光源用のライトまである。どれもこれも機材としての質は低いものの、中学生という千雨の身分を考えればかなりの高級品だ。

親の仕送りと、お年玉などのお小遣い、更には試験用に立ち上げたブログの広告収入などを合わせ、千雨がなんとか買い揃えた機材だった。

「よつと、ほつ」

機材の一つ一つを解体し、綺麗にまとめていく。一応、千雨の部屋は二人部屋だ。同居人がそうそう帰って来ないと言っても、その人間のパーソナルスペースを侵略するつもりは千雨に無かった。

部屋にあるスライド式のクローゼットは、中央を基点に左右で二分割。右側が千雨の領分だ。

そこに入りきるように、機材をうまく入れていく。

おそらくこの部屋の同居人には千雨の趣味がバレているだろう。だが無口な上に、他者にわざわざ喋るような性格じゃないので、千雨はその点安心していた。

「よし、入りきった」

クローゼットの片側に、機材は綺麗にみっちり収まっている。そこで一安心したものの、そこで一つ思い出した事があった。

「あ……国語の宿題」

漢字の書き取りがかなりあったのを思い出してしまう。しかも担当は「鬼の新田」だ。忘れたら倍返しの上に居残りである。

「なんで、あたしはもっと早く気付かないんだよお！」

慌ててカバンを漁りノートとテキストを取り出す。宿題のページを確認して、サーっと血の気が引いた。二時間近くかかりそうな量だ。

現在時刻は十二時過ぎ、普段なら寝ている時間だ。

「く、くっそおおー！」

先ほどまで「ちうだよー」などと言っていた面影は消え、半泣きになりながら千雨は宿題をやり出す。

ちなみに、宿題はやっている途中で寝てしまった上に、翌日は寝坊で遅刻した。更には宿題忘れにより、新田により居残りにされる事となるのだった。

秋も終わりを向かえ、冬になろうとするこの頃、日が落ちるのがめつきり早くなっていた。

今年の一学期の終わりから強制されている集団登下校だが、下校時にはそのシステムは二分割されていた。

当初は部活禁止令まで出たものの、一ヶ月を過ぎても解決しない事件に業を煮やし、部活は再開される事となった。

そのため授業後に帰寮する『帰宅組』と、部活後に帰る『部活組』、二つの集団下校時間が作られ、生徒はそのどちらかの時間で帰るのが義務付けられた。

そんな中、居残りをした千雨は微妙な時間帯に手が空くこととなっている。

空は薄暗くなり、夕焼けも沈もうとしている時間帯ながら、体育館からは元気な声が聞こえてくる。さすがにグラウンドを使う部活はそろそろ上がる様だが。

まだ部活組の帰宅時間まで三十分程ある。千雨としては正直言ってさっさと帰りたかった。

「帰っちまうか」

どうせ三十分もすれば自分の後ろを運動部の集団が歩いてくるのだ、襲われるなんて事は無いだろうとタカをくくる。

そうと決まればコートを羽織り、カバンを持って教室を飛び出した。そのまま昇降口で外履きに履き替えて、そろそろと校門目指して歩いていく。

幸いな事に集団下校の監督をする教師はまだいない様だ。

「よし！」

そのまま自然な振りをしながら校門を通った。千雨を呼び止めるものなどいない。

「なんとか脱出成功、って所か」

校舎内から見えないようにしながら、そそくさと通りを進んでいった。

(あ、そういえば)

千雨は昨晚コスチュームを弄っていた時に、欲しい色の生地が無いの思い出した。あと、色々な小物も出来れば作りたい。むずむずと欲望が沸きあがり、千雨は決断する。

「寄っていつちまうか」

現在、寮での門限や外出はかなり厳しく制限されている。今から帰ったのでは、おそらく外出は許可されないだろう。それに一人では外出許可は出ない。一緒に行ってくれるような、同種の友人などもない。

そうと決まれば急げ、と千雨は一路コンビニへ向かった。お金を下ろすためだ。

コンビニのATMで生地に必要な分の貯金を下ろし、商店街にある大きめの手芸店へ向かった。個人商店だが、へたなお店より遙かに品揃えが良い。店員が過剰に対応しないのも、千雨が気に入る所だった。

店に入るなり「いらっしやいませー」と挨拶はされるものの、中

等部制服を着ている千雨を見ても特に対応は変えない。

殺人事件が起きる前だったら、おそらく自分と同じように帰りに寄り道する生徒は珍しくなかっただろうが、事件を機にその数は激減している。

それでも何人かは千雨と同じ様に、集団下校を抜け出して寄り道するのだろう。

店員は千雨に気にも留めずに、店内の商品棚の整理をし始めた。

千雨はほっとしながら、目当てのコーナーへ向かう。

「ふふふ、これであの 코스 もより完璧に……」

ヒクヒクと口角を吊り上げながら、必死に笑いをこらえる千雨は、ぶつちやけキモかった。

「ありがとうございますー」

店員の声を背中に浴びながら、ほくほく顔で千雨は店を出た。

紙袋を腕の中で抱える様に持っている。中身は言わずもがな、だ。

「まさかあの形のボタンまで見つかるとはなー。 코스 専門店まで出張らなきや駄目かと思ってたぜ」

どうやらかなりの収穫があったらしい。

見るからに上機嫌といった風で、千雨は通りを歩いている。

街灯の下、人はまばらだ。

まだ殺人事件が解決していないため、住人も夜の外出は控えているらしい。

「　　つて、ああ、またあたしは！」

パサリ、と紙袋を落としながら、千雨は頭を両手で抱える。

手芸店で熱中するあまり、千雨は時間を忘れていた。時間を確認するために携帯を見るが　　。

「げっ……」

そこには何度もコールされた後があった。表示は「女子寮」と書かれている。まぎれもなく寮監からだ。

「ど、どどどどどうしよう」

門限はとっくに過ぎていた。

昨日に続く失態。冷気が首筋から入り込み、ヒヤリと背中を撫ぜた気がする。

「こ、こうしちゃられない」

千雨は手芸店の紙袋をカバンに詰めた。紙袋を露出させたまま帰ったら、取り上げられるのは目に見えていた。持ち物検査されたら結果は同じだが、どうにかその事態は回避せねばならない。

更にはこのコール回数が多さもごまかさねば。

「と、とりあえずバッテリー切れという事しておくか」

携帯の電源をプチリと切っておく。

そして猛然と走り出した。

目指すは女子寮、門限を三十分以上過ぎているが、せめて一時間には至らないようにしたい。というかしないとエライ事になる気がする。

元々体力の無い千雨だが、必死に走り続けた。

普段使わない小道まで駆使し、寮まで一直線に向かう。

だが、さすがに全力で走り続けていたら、ものの五分でバテてしまった。

「ゼーはー、ゼーはー」

口をだらしなく開きながら、必死で呼吸する。足はがくがくで、近くにある壁に背中を預けた。夜になり気温も冷えて、白い吐息が空中に舞った。冷気が喉下をザラザラにする。

「休んでる、暇、なんて、無い、のに……」

独り言も途切れ途切れだ。

なんかもう怒られたっていいかなー。大体三十分も一時間も大して変わらない様なー。どうせ怒られるんだからもうゆっくり帰ればいいんじゃないねー。

そんな誘惑が千雨を襲う。

「うん、そつだよな」

そしてあっさりと千雨は誘惑に負けた。

今更ジタバタしたってしょうがない、なる様になれた。と虚勢を張る。

そんな時、少し薄暗い近くの路地に動く影があった。

「ひっ！」

千雨はビクリ、と過剰な反応をしめした。そして思い出すのだ。「未だ猟奇殺人事件の犯人が見つかっていない」という事を。バクバクと心音が強くなり、サーッと血の気が引いた。よく見れば千雨のいる路地は薄暗い。

麻帆良のご多分に漏れず、石畳の引かれた道は車道として機能してなく、必然道は細い。

そのため街灯の数も最低限だ。

街灯の影になり横道となっている路地裏を、千雨は硬直しながら見つめ続けた。

ポケットにある携帯に手を当てるも、電源が入ってないのを思い出した。

(な、なんで電源切っちゃうんだよ、あたしは)

急いで電源を入れようとするも。

「ニャー」

「にゃー？」

聞こえてきた声をオウム返ししてしまう。

路地から出てきたのは黒猫だ。冷静に考えれば、動いた影だった。かなり小さかった。人のはずなど無いのだ。

「な、なんだよ。そうだよな、いきなり出くわすなんてあるはずねえ……」
「ニャー」

猫は声を上げながら、千雨に寄って来る。

「、お前、ドラのくせに嫌に人懐っこいな」

千雨の足元に、黒猫がすりすり擦り寄ってくる。

女子寮の裏にもドラ猫が数匹いるのを思い出す。どうやら寮の誰かが餌付けしているらしいが、あの猫達は千雨を見るなり親の仇を見るように牙をむき出しに威嚇する。その上、さっさと逃げ出してしまうのだ。

それを考えれば、目の前の黒猫はとても可愛く思えた。

「よし、じゃあせつかくだからお前に施しをやるう」

「ごそごとカバンを漁れば、千雨の秘蔵しているスティック型の菓子が『ポツチー』が出てきた。ポツチーを一本出し、そのチョコ部分の半分を自分でかじり、残った半分を猫に向けて放り投げた。

「ニャー」

猫はかりかりとポツチーを食べ出す。

千雨はしゃがみながら、食べている猫の頭を撫でた。

「お前も飼い主か、ちゃんとした寝床を見つけねーと、冬が越せないぞ。今年は寒いらしいしな」

猫は相変わらず食べている。そんな猫を見ると、千雨の心も癒された。

ピクリ、と猫の耳が動いた。

「お、どうし」

千雨が何も言う間もなく、猫は食いかけのポツチーを置いて、脱兎の如く走りだした。

「??？」

しゃがんでいる千雨の背後には街灯がある。そのためしゃがんでいる千雨の目の前には、自らの影があった。そしてその影に、もう一つの人影が重なった。

「え」

背後に人がいる。地面に作られたシルエット　見覚えがあった。それは確か『夢』で。

「ッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ザクリ、という音と共に千雨の背中の一部が焼け付いた。コートと制服が何か鋭いもので突き破られ、激痛が体中を襲った。

余りの痛さに、自分が何を叫んだのかすら聞き取れなかった。

視界が黒と白に明滅する。まるで炎の中に飛び込んだ様だった。

気付いたら千雨は地面に倒れていた。

ざらりとした石畳の感触が、顔の側面をやすりの様に削っている。男に押し掛かっている様だった。

体に力は全然入らないし、男に少しでも力を入れられたら、背中から激痛が体中に走った。目からぼろぼろと涙が溢れる。

痛みをごまかそうと叫び声を上げようとするものの、無骨な男の手に口元をふさがれ、何も叫べない。

(男　、　こいつ男)

逆行で顔は見えないものの、シルエットは屈強な男の形をしていた、明滅する視界の中、なぜか男のシルエットだけははっきりと確認できた。

（嫌だ、怖い、嫌だ、助けて、助けてよ。もう、『わたし』は、もう　なあウ　ツク）

脳内に激しいノイズが入る。混乱と恐怖と激痛のため、思考は纏まらず、ただ涙だけが溢れた。

（あああああああああああああああ！！！！）

先ほどを越える激痛と共に、ゴリゴリという耳障りな音が体の中から聞こえていた。

いつの間にか口の中には布が押し込まれ、上半身は男の足と膝で固定されていた。申し掛かれる状態だった。

激痛の根源は右腕。痛み之余り、千雨はガンガンと石畳に頭を打ち付ける。とてもじゃないが、耐えられる様な代物では無い。

視界の片隅で、男が自分の右手を、巨大なナイフで切り落とそうとしているのが見えた。

「ヒッ！」

口に布を詰められながらも、息を呑む自分の声が聞こえた。手を切ろうとする恐怖が、激痛と共に脳内を駆け巡る。

ああ、これで意識を失えたらどれほど楽なのだろう。だが、現実は無情だった。

千雨が意識を失えど、激痛で再び起きてしまう。

一時間だろうか、十時間だろうか、それとも十秒なのか。千雨に

光景が、ゆつくりと過ぎていく。千雨はなぜかそのナイフが待ち遠しく感じられた。もうすぐこの体を覆う苦痛から解放される、その本能が求めるのだ。

そして脳内に様々な人の顔が過ぎった。両親、数少ない友人、クラスメイト、寮の同居人、そして　声。金色の小さな影。動物、なのだろうか。

（あの『ネズミ』は、何て言った　）

漆黒。

千雨の意識はそこで切れた。

『えー、只今緊急のニュースが入りました。』

今年の七月より続いている『麻帆良連続殺人事件』の続報です。

つい先ほど、埼玉県麻帆良市において新たな遺体が発見されました。

被害者は麻帆良学園中等部に在籍する『長谷川千雨』さん、十四歳です。

遺体は今日の午後七時半頃、長谷川さんの住む寮の近くの通りで発見されました。

遺体には過去の殺人事件と同じく、右手の欠損が有り、同一犯との見方がされています。

警察の発表によれば、まだ死亡時刻は特定出来ないものの、長谷川さんが午後五時に学園を出たとの証言を得ているそうです。

他にも続報が入り次第お伝えしようと思います。では次の

つづく。

2 (後書き)

— 応まだ続きます。

ぼやぼやとぼやけた意識を振り払う。

なんだかいつの間にか寝ていた様だ、と千雨は思い出す。

どうにも記憶が曖昧だった。なにか恐ろしい『夢』を見たような気がする。

(いや、今はそれどころじゃないな)

なにせ授業中だ。

さすがに板書もせずにしていたら、教師から大目玉を喰らうだろう。

「あれ？」

そう思い、黒板を見て違和感に気付く。

(あんな公式やったっけ)

数学の時間、黒板には見覚えの無い公式が書かれていた。前回やった授業とは大分違う。

(おかしいなー、もしかして教師がページ間違えてるんじゃない)

周囲を見渡すが、クラスメイトの誰もが普通に板書をしていた。こういう時に率先して教師に質問をする雪広あやかも、平然と授業を受けている。

(え？　もしかしてあたしって遅れてるのか？　もうすぐ期末だっ

てのに、得意な数学すら付いていけないなんて)

思わずショックを受ける。

そこで更に衝撃的な事に気づいた。

黒板の端に書かれている日にち、それは 。

「じゅうにがつ……」

十二月。窓の外は曇天模様で、まさに冬といった様相をしていた。

(いや、だって昨日まで十一月だったろ、なんでもう十二月。それにこの日にちじゃ期末なんて

終わってるし。あたしは期末を受けた記憶なんて)

自分のノートを確認しようと、机を見た。だが、そこにノートなど無い。

あるのは花瓶と、花瓶に挿されている一輪の菊の花だけだ。

「えっ」

千雨は言葉を失う。思考すら固まった。

周囲のかりかりというノートとシャープペンが擦れる音と、教師のボソボソと喋る声だけが響く。

「おい！ これは何だよ！」

千雨は立ち上がり叫んだ。だが、周囲は無言。千雨の声にも一顧だにしない。

「くっ」

その反応に、千雨は恐怖する。まるで周囲の人間には自分が見えてない様な。。

「おい、綾瀬。これはどんないたずらなんだよ、悪趣味すぎるぞ！」

隣の席の綾瀬夕映の肩を強く揺する。しかし、小柄なはずの綾瀬だが、まるで岩の様に硬く、微塵も体は揺れなかった。

「なんか言えよ、頼むからさあ！」

綾瀬を諦め、周囲の人間に呼びかけるも無言。

「くそ！ くそ！ どうなってるんだ！」

千雨は教室を飛び出すために、後ろのドアを開けようとするが。

「くっ、堅い」

まるで引き戸が接着剤で固定されている様だった。

だが全身の力を振り絞り、体重を掛ける事で、引き戸が少しだけ開いた。

「よっー！」

どうにかその隙間に身を滑らせ、千雨は廊下に飛び出した。

ガラリ、と音がしてクラス全員が後ろを振り返った。

「え、何？ 今の音」

「何でドア開いてるの」

「おいおい、誰だ誰だ、ドアを開けた奴は」

クラスの喧騒を、教師がピシヤリと押し留めた。クラス内を見渡すが、誰一人欠席はいないし、教室を出て行った生徒もいない。

だが、教室の後ろのドアは少しだけ開いていた。引き戸とはいえ、風で動くような代物では無いだろう。

「お、おい。誰がやったんだ。今言えば先生は怒らないぞ」

廊下に人影も無い。足音もしなかった。ただドアだけが動いたのだ。

「嘘！ マジでドアだけ動いたの」

「だって誰も席から離れなかったじゃん」

「も、もしかして」

クラスメイトの視線が一つの席に向けられた。

花瓶が置かれた席、そこは先日殺人事件に巻き込まれた少女の席だった。

「ま、まさかー」

「いや、でもそれくらいしか」

「お喋りはそれくらいにしろ！ 先生はこういうイタズラは嫌いだぞ！ やった者はさっさと白状なさい」

教師の言葉に再び皆が黙り込む。

ドアが開いた時、クラスの全員が前方の黒板を見ていた。ただ二人を除いて。

そのうちの一人は、無言ながらもその現象に内心驚いていた。だが、周囲に話す事はしない。なぜなら、彼女には確信があったのだ。

千雨はどうか学校を抜け出し、街中に来ていた。
あの場所にいたら気が狂いそうだったからだ。

「なんなんだ。本当にわけわかんねえ」

街を歩く人達は皆厚着をしている。そんな中、千雨だけはブレザーにスカートといういつも通りの制服だ。しかし、不思議と寒さは感じなかった。

通りすがりの人物は、千雨の姿を見ても不思議に思わない。いや、まるで視界にすら入ってないかの様に。

「おい、まさか。嘘だろ」

試しに近くの人間に話しかけてみる。

「なあ、おばさん。あたしが見えるよな！　なあ！」

買い物をしに着たのだろう、手にエコバッグを持っている中年の

女性は、千雨の声に一切反応しない。それどころか顔の前で手を振っているのに、瞬きすら自然なままだった。

「は、ははは。どうなってんだよ……お父さん、お母さん、助けてよ」

弱気になって呟き、気付く。そうだ、両親に連絡をしよう。

「携帯電話、携帯……」

スカートのポケットに？右手？を突っ込む。

「は……」

何故今まで気付かなかったのだろうか。右腕の先、ブレザーの裾から先には？何も無かった？。

文字通り、右手首から先が、綺麗に切断されていた。

そうだ、綾瀬の肩を揺すった時にも、教室のドアを開けた時にも、右手は使っていなかった。

「う……あ……」

混乱。グルグルと思考が逆流し、記憶を刺激する。千雨の網膜に、あの時の出来事がまざまざと蘇った。

「そうだ、あたしはあの時」

逆光の中の男性、体を巡る激痛、黒猫、血、大振りのナイフ、刃の光、口に詰められた布、骨が削られる音。

「あたしは、死んでいるのか」

体から力が抜ける。

千雨は地べたに座り込んだ。冬にも関わらず、地面の冷たさすら、今の千雨には伝わらない。

千雨は通りの中央で、呆然としながら座り続けた。

猛烈な孤独感に襲われ、とても人のいない場所に行く気になれなかったからだ。

ここに居たからといって、誰かに気付いてもらえるわけではない。それでも、人波に埋まる事で、少しだけ渴きが癒えた気がする。

あの時の光景がフラッシュバックする度に、恐怖が蘇ってくるのだが、不思議と恐怖は少しずつ和らいできた。

座りながら自分の持ち物を確認するが、ポケットの中には何も入っていないかった。

右手が無くて不便だったが、体中探したものの、携帯電話も財布も寮の鍵も無い。

「どうしよう」

「自分が幽霊だ」という想像も、現状を省みれば信じざるを得ない。そしてそれを自覚すると、誰かの携帯電話を使えばいいのではという結論に行き着く。

「そつだ、緊急事態なんだ。多少我慢してもらおう」

とにかく両親の声が聞きたかった。

近くを歩いている不良の様な男子高校生を見つける。不貞の輩なら、多少罪悪感も紛れると思ひ、彼の後ろポケットからはみ出る携帯電話を取ろうとした。

「悪いが、借りるぜ」

携帯電話を手で掴むも、その堅さにビックリした。まるでポケットに完全に固定されている様だ。

「ちょ、どうなってやがる！ この、くそ！」

携帯電話を掴んだまま、千雨は男子高校生にずるずると引っ張られる形となる。

そして地面に盛大に転んだ。

「う、嘘だろ」

男子高校生は普通に歩いており、千雨が携帯電話に触れた事すら気付いてなさそつだ。

「クソ、クソ。どうすれば良いんだよ」

帰りたい、そういう気持ちか沸く。そして、自分の寮の部屋が気になりだす。

「そつだ！ あたしの部屋！」

千雨は寮を目指して走る。

いつの間にか日は沈み、周囲は薄闇に覆われていた。まるであの日の様だ。とは言っても、千雨にとってはつい先ほどの様に感じられるが。

あの時とは違う、安全な道筋を進みながら、女子寮へとやってくる。

エントランスは自動ドアだ。案の定、千雨には反応しない。

「……待つか」

千雨は誰かが通るのを待った。五分ほど経ち、ちょっと買い物にも行くのだろうか、財布を持った二人組みの女子が、内側から自動ドアを開けた。

「今だ！」

二人とすれ違う形で、千雨は女子寮へと潜りこんだ。

ずんずんと廊下を進みながら、自分の部屋へと向かう。

見慣れたドアの前で、千雨はとりあえずドアノブを回してみた。

だが、堅くてピクリとも動かない。

部屋の鍵も無い。

「どっしりっしょっし」

インターフォンを押せるか分からないが、どうせ中には誰もいないだろう。

千雨は苛立ちを隠そうともせず、ドアを蹴った。

「この！ クソ！ なんで！ あたしが！ こんな目に！ 遭うんだよー！」

蹴りながら、目に涙が溜まっていった。

だが、千雨が全力で蹴ったせいか、ドアが少しだけ動いた。カチカチと金属が擦れる音がした。

そして、内側からガチャリという音が聞こえる。

「え？」

鍵を開ける音。まさか住人がいるのか、と目を見張れば。

開けられたドアの先には、千雨の寮での相方 同居人が立っていた。

どうせ見えまい、とタカをくくり、ドアの隙間から内側に入ろうとするも。

ガツン、と見えない壁の様なモノに千雨はぶつかり、痛みにつずくまってしまう。

「な、なんだこれ」

ペタペタと触る。ドアは開いているのに、ドアを境に透明な壁が存在していた。

そして、千雨の同居人がそんな？千雨を見ていた？。

「え？」

千雨は同居人の視線に気付く。

「お前、まさかあたしが見えるのか」

千雨は自分を指差し、相手に呼びかける。同居人はコクンと頷いた後、ドアを開いて千雨を招き入れた。

《寮の部屋の入室許可》を入手しました。

千雨は部屋に入り同居人 ザジ・レイニーデイを見つめた。
彼女は今日、初めて千雨と視線を合わせた人物だった。

「お前、本当にあたしが見えるんだな。良かった、良かったよお」

うわぁ〜ん、と涙を流しながら、千雨はザジに抱きつく。
ザジは千雨の背中をぼんぼんと擦った。

熱を今まで感じなかった千雨だが、ザジの体の暖かさだけは感じられた。その暖かさは、千雨の存在そのものを包み込んだ。
十分ほど達、千雨はザジから離れた。

「うぐ、すまねえ。でもあたし嬉しくてさ」

涙を流しながらも、千雨の顔には苦笑いが浮かんでいた。

「なあザジ、あたしはどうなったんだ。あたしが死んだのはわかったんだが、それから今まで何があったんだ」

千雨は口早に質問するも、ザジは首を傾げるばかりだ。

「おい、何とか言ってくれよ!」

また不安が過ぎる。

「おいつてば！」

「ごめん。聞こえない」

ポツリ、とザジが言葉を漏らした。

「え、聞こえない？」

千雨は自らの口元を指差す。そうするとザジはコクコクと頷く。

「あ、あたしの姿は見えるが、声は聞こえないっていうのかよ……」

せつかく光明が見えたと思っただが、反動で再び落ち込む。

「で、でも。だったら」

部屋を見渡した。だが、部屋の中に物は少ない。

本来、千雨の私物が大量にあるはずなのだが、千雨の物だけ綺麗に無くなっている。おそらくこの一ヶ月の空白の間に片されたのだろう。ザジの私物が少し置いてあるばかりだ。

ザジは普段、麻帆良に常設されているサーカス団で寝起きをしている。一応学園の規則上、寮生活を送っている形になっているが、学園から特別許可を貰い、あちらでの生活を主としているのだ。

そのためザジの私物は少ない。幾つかの着替えに、部屋に最初から置かれている勉強机とベッドの上に、幾つかの小物が載るばかり。

千雨はザジの机の上に目当てのものを見つけた。

ボールペンとメモ帳だ。

「ちょっと借りるぜ」

千雨はボールペンを掴むが、とんでもなく重い。

「な、なんて重さだ」

力を振り絞り、どうにか持ちながら、メモ帳に何かを書こうとする。されど、インクはまったく出なかった。

「ふ、不良品かよ！」

ザジが横からポイ、っと千雨の持っているボールペンを取った。メモ帳にペンを走らせれば、さらさらとインクの跡が残る。

「あ、あれ。普通だな」

千雨は腕を組んだ。一体どうなっているんだろう。

「このボールペン、あげる」

「え？」

ザジにボールペンを手渡しされた。そうしたら、先ほどまで重かったボールペンは、普通と同じように片手で悠々と持っていた。

《ザジのボールペン》を入手しました。

「おお、今度は書ける」

幸い千雨は左利きだ。右手がないために紙は押さえられないものの、ザジが協力してくれた。

さらさらとボールペンで書ける事を確認した後、千雨は筆談でザジに聞ける事を片っ端から聞いていく。

千雨が殺された後、麻帆良はやはり大騒ぎになったらしい。

一週間ほど学校は休校となり、部活禁止令も出された。

その間に、千雨の告別式も隣の市で行なわれ、クラスメイト全員が参加してくれた様だ。

ちなみに千雨の両親は、麻帆良の隣の市で生活している。電車でも十分もかからないだろう。だからこそ、麻帆良での幼稚舎からの一貫教育を受けさせているのだ。

寮の同居人であるザジにも、千雨の両親は挨拶に来たらしい。そして部屋の遺品の片付けも一緒にやったとか。

「だから何も無いのか。つか、あたしのパソコンにコスチュームも」

死んだ後とは言え、まさか自分の秘密の私物を両親に見られるかと思うと、羞恥が走る。

その後はいつも通りに時間は過ぎたとの事。どうやら、またもや犯人は捕まっていらないらしい。

「まだ、捕まっていらないのか」

ギリギリ、と残った左拳を握り締めた。

そして異常があつたのは今日だったらしい。ザジが言うには、ふと気付いたら授業中に千雨が席に座ってたらしい。

最初は驚いたものの、まるでホログラムの様に揺れ、少し経ってから形が保たれたらしい。

だが、クラスの誰もが千雨を見ない。ザジも最初は幻覚か何かと思ったが、教室のドアが開いた事で、千雨の存在を確信したらしい。そしておそらく千雨が寮の部屋に戻ってくる事も予測し、珍しくこの場所で待っていたとの事。

「そっか。お前はあたしの事見えてたのか。そりゃ教室であたしの事指摘されたら変人扱いだよな、まあとにかくありがとう。待っていてくれてさ」

ペンでさらさらとお礼の言葉を書くと、ザジはコクンと頷いた。

「でも、なんでザジだけ見えるんだ。他にも誰か」

と思える。誰が自分を見てくれるのだろう、親しい人物だろうか。クラスでザジ以外に親しくした人間がいただろうか いや、いない。大抵の場合、千雨は一人で行動していた。

そのため、週に数回だけ部屋に帰ってくるザジと、一番行動を共にしていた気がする。

「……ぼっちだったからか」

ズーン、と重い沈黙が過ぎった。声は聞こえずとも、ザジもなんとなく察したらしい。

落ち込む千雨の頭を、無言のまま撫でた。

「これからどうしよう」

千雨は考える。自分が死んだという事は、痛いほど良く分かった。ならば、なぜ自分は幽霊などになったのだろう。そしてこれから何をすればいいのか。

ザジが気を利かせて、部屋に備え付けのテレビの電源を入れた。映ったのはニュース番組、そして千雨の写真だった。

「あ、あたし」

ザジがチャンネルを変えようとするのを、千雨が制した。そしてモニター画面をじっと凝視する。

ニユースキャスターが、千雨について話している。どうやら麻帆良の殺人事件の特集をやってるらしい。

件の名物学園長が映り、千雨を「優秀で社交的な生徒だった」などと言っていた。

今度は告別式の映像に切り替わり、クラスメイトが参列している。そしてその中央には遺影を抱えた千雨の両親がいた。

「お父さん、お母さん」

また涙が溢れた。

二人は気丈に振る舞いながら、報道陣に向けて頭を下げた。

マイクを向けられると、どうにか言葉を綴って答えていたが、途中で泣き崩れてしまう。

「うう……うわああああ」

床に千雨の涙がぼたぼたと落ちる。だが、涙は床に触れると綺麗に消えてしまった。

ほんの数分程の映像だったが、それだけで充分だった。

泣き崩れる千雨の背中を、ザジはまた撫で続けた。ザジには千雨の嗚咽は聞こえない、だが聞こえなくても分かっていた。

ふと声が聞こえた。

<千雨、お前はそうやって泣き続けるのか>

違う、このままでいられるか。

悔しい。一方的に何もかも奪われたのが悔しい。

千雨の中にある『夢』の断片が、様々なモノを千雨に見せ始めた。その多くが理解できない。されど、その中に光るモノだけはわかった気がする。それは自分も持っていた。

「そつだ終わらせない。終わらせるか！」

唯一残った左手で、自分の胸元を強く叩いた。

目に、微かな光があった。意志、千雨が貫き通そうとする、？光の断片。

自分を殺した男のシルエットが過ぎつた。あの男、自分の右手を奪い去った男。

考えると、傷口がずきずきと傷んだ。

その痛みが、ぼやけそうになる思考をクリアにする。

自分は死んだ、だが存在はしている。

奇跡としか言えない可能性。それでも、まだやれる。

「あたし いや、？わたし？が捕まえるんだ！」

テレビには、千雨が襲われた現場が映されていた。それを凝視する。

そつ、まだ終わってはいないのだ。

ステータスその1

NAME：長谷川千雨

職業：幽霊

性別：おんな

レベル：0 (1)

HP：10

MP:0

ちから:1
すばやさ:5
たいりよく:1
かしこさ:11
うんのよさ:-5

所持スキル

- ・【遠い記憶その1】 記憶の断片
- ・【ゆうれい1】 幽霊の嗜み
- ・【プログラム1】 プログラムの作成
- ・【許可無き自由】 許可無く、他者の所持品を使えない、他者の領域に入れない
- ・【欠損部位《右手》】 右手首を失っている。全ステータス-2
- (2)
- ・【 】 の 【 】 まだ君は戦える

所持品

- ・ザジのボールペン ザジより貰ったボールペン
- ・寮の部屋の入室許可 元自室に自由に入れる
- 1 死んだためにレベルは初期化。だがステータスは完全には初期化せず、生前の名残あり。
- 2 利き手が欠損してる場合は-3。

所持品

- ・ザジのボールペン ザジより貰ったボールペン
- ・寮の部屋の入室許可 元自室に自由に入れる

ステータスその2

NAME:ザジ・レイニーデイ

職業:道化師

性別:おんな

レベル:15

HP:120

MP:65

ちから:17

すばやさ:25

たいりよく:21

かしこさ:14

うんのよさ:16

所持スキル

・【道化師2】 他者を楽しませられる

・【ペルソナ1】 ペルソナを被る事ができる

・【アーティファクト】 ??

・【 】 ?

つづかない。

3 (後書き)

というわけで終了。

幽霊になってしまい、様々な制限が付くことにより、日常がRPGの様になってしまっ、みたいな。

・目標は謎のシリアルキラー(笑)を倒すこと。
・【許可無き自由】は【ゆうれい】スキルが上がると相殺されていく。

・レベルはおおよそ年齢¹¹±2くらい。成人になるまでは大体平均で一年に1レベルあがる。

・一般人はレベル概念を知らない。

・ちなみに千雨さんは幽霊になってしまったので、現状のままじゃレベルが上がりません(笑)。(いわゆるRPGのザコ敵状態)なにかしらの外的要因によりロック解除しないと無理。

クソゲーすぎる……。

補足もおしまい。

元の話書くのに戻ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5530u/>

追憶の長谷川千雨

2011年7月15日15時26分発行